

令和 3 年度 連携研究スキームによる研究（委託研究課題）
評価報告書

研 究 テ ー マ 名	超高齢社会における社会・健康問題の解決に資する学際的研究
委 託 研 究 課 題 名	成熟社会における食の価値に関する学際的研究
研 究 実 施 期 間	令和 2 年度～令和 4 年度
研 究 総 括 者	東京大学 中嶋 康博
研 究 の 概 要	本年度は、食の価値についての検討を、抽象的な食事・食選択を前提にした議論から具体的な財や場面を特定した議論へと展開することとし、昨年度WEB調査で得られたデータを解析するとともに米とトマトを対象にした追加的なWEB調査を実施して、食の価値項目の精査を進めた。脳活動計測については、具体的な品目の選定と条件を確認した。また、フィールドサーバーによる情報収集、動画を用いた農村風景の注目度の定量的把握、脳機能計測、官能評価が次年度になってすぐ始められるように準備に努めた。
評 価 結 果	【評価項目毎の評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。 ○ 評価委員会名及び開催日 「超高齢社会における社会・健康問題の解決に資する学際的研究」評価委員会 令和 4 年 3 月 10 日開催 ○ 評価委員名 木立 真直 委員 （中央大学商学部 教授） 廣政 幸生 委員 （明治大学農学部食料環境政策学科 教授） 竹下 広宣 委員 （名古屋大学大学院生命農学研究科・農学部 准 ○ 社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある（2） A:大きな意義がある（1） ○ 政策研究と連携して研究することによる政策研究への示唆の評価 S:非常に多くの示唆が見込める（2） A:多くの示唆が見込める（1） ○ 学術面からみた研究成果の評価 S:学術的に非常に高く評価できる（2） A:学術的に高く評価できる（1） ○ 研究計画の妥当性 S:非常によい（1） A:妥当である（2） ○ 研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である（3） ○ 研究目標の達成度 S:達成度は非常に高い（1） A:達成度は高い（1）

教授) ○評価基準 ・社会的ニーズへの対応 S.非常に大きな意義がある A.大きな意義がある B.意義がある C.意義が小さい D.意義は見出しがたい ・政策研究と連携して研究する(した)ことによる政策研究への示唆の評価 S.非常に多くの示唆が見込める A.多くの示唆が見込める B.示唆が見込める C.示唆は少ない D.示唆は見込みがたい ・学術面からみた研究成果の評価 S.学術的に非常に高く評価できる A.学術的に高く評価できる B.学術的に評価できる C.学術的な評価はやや低い D.学術的な評価は低い ・研究計画の妥当性 S.非常によい A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.妥当ではない ・研究資源・実施体制の妥当性 S.非常に良い A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.見直しが必要である	B:概ね達成している(1) 【総合評価】()は3名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題ない(2) 2:ほぼ順調であるが、改善の余地がある(1) 【評価委員からの主な意見】 ○成熟社会の食の価値を発現、促進することは今後の政策の基礎を成すと考えられるので、政策研究としては重要である。 ○消費者の食選択の背景にある理論・法則を学際的に解き明かす研究であり、今後の食環境をサポートする政策の研究の発展に大きく寄与する。 ○自然科学、人文科学、社会科学の学際的な研究として、それぞれの視角からの高い成果が期待できる。 ○食の倫理要素の価値の定量評価に加えて、価値の多寡と脳活動のリンケージを明らかにする知見は学術的に高く評価されると期待できる。 ○オンラインを活用できない調査実験で十分なサンプルを得るためには、実施体制の強化が望ましい。 ○コロナ下でも方法の見直しなどをしながら、可能な範囲で研究の進捗が図られている。 ○成熟社会(超高齢化+SDGs+ポストコロナ)における豊かな食とは何かを学際的に研究し、消費者がその豊かな食を選択できるようにするために、「食の価値」をどのように伝達すればよいか、その仕組みを実践的に検討するという重要な課題に取り組む体系的な研究として高く評価したい。 ○高齢者をも含めて高度な食の選択を容易に行えるように、インクルーシブな食料供給システムを設計するための学術的な礎の構築の進展が期待される。 ○食の価値、特に、倫理の問題は新しい分野であり学問的価値、必要性は高い。 ○コロナ禍でやや実施困難な状況にあったと思われるが、3つの領域研究の組み合わせはよく考えられており、学際的な研究成果が十分に期待できる。 ○ソーシャルディスタンスが求められ中、最終年度の調査実験を計画どおり研究遂行するには、従来よりもかなり時間を要すると想定される。その中でも精度の高いデータを多く得るためには、人的資源の増強とそれを可能とする研究費の支援が必要になると考える。
---	--

・研究目標の達成度 - S.達成度は非常に高い - A.達成度は高い - B.概ね達成している - C.達成度はやや低い - D.達成度は低い ・総合評価 1.順調に進行しており、問題ない 2.ほぼ順調であるが、改善の余地がある 3.計画等を変更する必要がある 4.中止すべきである	
今 後 の 対 応 方 針	コロナ禍にあって現地での活動を伴う研究の進捗に影響が出たものの、最終年度となるため、2021年度中に準備を進めたフィールドサーバーによる情報収集、動画を用いた農村風景の注目度の定量的把握、脳機能計測、官能評価を2022年度の早い段階で実施して、分析を行う。 また、これまでの研究で得られた脳科学視点、経済・心理学視点、品質評価学視点から「食の価値」の基準化・表現法の検討を行い、成果を取りまとめる方針である。